

うたごよみ 曾於文藝

「題字」

末吉文化協会会員
瀬戸口 淳民 氏

俳句

千草俳句会

一輪車のりまはす子等四温晴

福嶋 武子

水鳥の一声ひびき沼を飛ぶ

川辺 良彩

買初めの有田焼てふ湯呑み一つ

今村 久子

大隅俳句会

枯木立数へて歩すや晝の月

河南 ミホ

ひとり居にしづかに舞ふやぼたん雪

川崎 綾子

寒の水鯉の動きも硬かりし

中島 玉水

短歌

末吉短歌会

乾きたる音して兄の爪を切る

片麻痺著き指の細かり

長倉 佳津子

ふつつかな娘ですがと言ひし
後声を詰まらす夫の横顔

森岡 ちどり

水平線に巨き夕陽が沈みゆく
胸の鼓動に送られながら

草野 ミツ子

大隅短歌会

悔いのなき今日のひと日を樂
しまん阿蘇の火口は澄みて見
えゆく

安藤 フヂ子

夕風に仕舞い忘れし風鈴が季
節はずれの音させて鳴る

川田 サダ子

木枯らしに散りし落葉は坂道
を可笑し可笑しと転てゆけり

川辺 玉枝

財部短歌会

幼子の両手離れしイチヨウ葉は
金色放ち足元華やぐ

児玉 次雄

タンポポの綿毛ひとひら舞ひ立
ちぬ降りるをためらひ風に乗り
たり

井上 澄子

妻の病苦後に伝へん人の世の生
きざま知らすも吾のつとめよ

橋口 貞男

務め終へひらり舞ひ散る柿の葉
の彩り模様それぞれの妙

富山 治雄

「どっこいしょ」と声かけて立
つおかしさに無様な吾の先案ぜ
らる

川俣 若

咲き初めし山茶花の道なつかし
き親友を訪ねむバスに揺られて

杉村 リカ

狂ひ咲きぞと思ひみし山茶花の
近づき見れば蕾の数多

瀬戸口 芳子

霜枯れて小さくしほみしハゼの
葉は小春日和に生命輝く

祝迫 道雄

薩摩狂句

にがごい会末吉支部

庭ん草 大家族で筆つ
楽さけすん

堀 うど

家族で集つ 旅行の吟味ん
楽しこつ

桐野 奈世

家族で旅 爺様の財布も
全ぺ空

南川 匂匂

大隅薩摩狂句会

飲んだたる 日頃ちや歌とわん奴が歌とつ

木良木 五徳

飲んだ勢き日頃の愚痴を
全部言つ

新屋 涼子

商売上手日頃のケアが
物を言つ

福元 多喜子